

会員は支部サービスを盛り上げよう。
関東支部はセラ協活動の試金石役と牽引役を

豊橋技術科学大学（監事） 水谷 惟恭

1. 支部の「古希」を祝う一論文誌は今年 118 巻

日本セラミックス協会が創設されたのが 1892 年、今年の論文誌は 118 巻。東工大の窯業の第 1 回卒業生は明治 19 年（1887 年）。アメリカンセラミックスソサイアティより古い。関東支部開設から 70 年、人間界では「古希」と称する。関東支部は 1 都 9 県の会員が含まれる。ごく最近まで「窯業」、窯で火を焚いて製品を作る業種。明治初めに、「ceramics を窯業」と日本語で当てたのが始まり。セラミックスと言って市民に分かってもらえるようになったのは東京オリンピック以降。全会員の 39.6%が関東支部所属、学生会員も全学生の 43%が関東支部とダントツ。今日の研究発表会は 26 回、25 年が経た。四半世紀。口頭発表 63 件、ポスター発表 38 件、100 件を超える盛況。おめでとう。

2. 支部と部会と PR - 社会貢献

学会には支部と部会があり「支部は地域」で、「部会は専門分野」でまとまる。どちらも特色があるし、役割も明確。両者が縦糸、横糸になって網目構造を形成。セラ協のような公益法人格の学会は会員対象だけでなく「一般国民向けの社会貢献」も重要な活動。日本の大学は海外ではほとんど知られていない。なぜか？身内向けの紹介で、海外の目線での PR は皆無。「支部の社会貢献」はすこぶる重要。これから「東アジア戦略」「Campus Asia」。私が支部長だったのは 1999 年 5 月から 2001 年 4 月まで。世紀の変わり目。バブル崩壊の後遺症が残り、「JAPAN as No.1」と煽てられたのもどこかに消えてしまった。

3. 支部研究発表会 - 学生の研究社交界へのデビューと登竜門

セラミックスに科学の光を当て、理論化にトライしたのが 1960 年頃からの MIT グループ（Kingery の Introduction to Ceramics 出版）。セラミックスは益々、複雑系になり、ファジーの領域も多い。極力単純化してその要因を拾い上げる努力は捨ててはならない。その複雑、ファジーを逆手に捉えて、闇夜を進むこともイノベーションには不可欠。いずれにしても、学生一人や指導教員一人の手に負える代物ではない。今や異分野、異業種のスキルや知識をセラミックスに吹き込むことだ。この「交流場」が研究発表会だ。同じ仲間を避けて、なるべく、異なった見方をする人を見つけることだ。学生が「セラミックスらしからぬ場」に分け入ることを望むし、また、質問もとんでもない方向からしたい。このようなときに役立つのは地道な観察と突飛なアイデアである。関東支部は産学官（独）の連携を造りやすい環境にある。

4. 更なる支部活動

革新的な関東支部活動はセラ協活動への提案の試金石である。21 世紀に入って 10 年。私が部会長時代は 20 世紀の総括と 21 世紀への期待が交叉し、セラ誌にも特集テーマが登場。今、見直すと、協会全体のステップアップや人材育成の視点が抜けていたように思う。20 世紀後半はセラミックエンジン、光ファイバー、セラミック超導電体などが登場しセラミックブームが起こった。21 世紀は前例踏襲では行くまい。人材育成も将来大きな底力になろう。（2010. 7. 23）。

5. 補足

最近、セラミックス素材、特に陶磁器的素材が身近なものに使われている。酷暑を防ぐ遮熱カーテン、金属アレルギーを防ぐ装飾具、集中豪雨の吸収多孔石など日用品から災害防止品まで。セラミストの提案でなく、門外漢の発想も。我々はもっともっと地域の社会や産業に広めようでは有りませんか。セラミックスの基本に戻っても。「セラミックスを使いこなす」時代に突入ではないでしょうか。